

# 「年間行事論」における学習活動方式化の試み

An Experiment on Learning Activity Methods in Accordance with  
“The Annual Event Theory”

長沢 ヒロ子

(Hiroko NAGASAWA)

## I はじめに（テーマ設定までの経緯など）

本学短期大学部専攻科生を対象とした「年間行事論」を講じて、3年めを了えたところである。例年初回授業時に行ってきたアンケート調査によると、学生の家庭での伝統行事の実施率はかなり高い。正月の92.8%をトップに、大晦日60.5%、冬至60%、節分56.5%、お盆46.8%、菖蒲湯44.7%、七草20.6%、秋の彼岸20%、春の彼岸15.4%、月見14.5%、小正月9.3%、ひなまつり9.1%となる。学生の大半が都市部在住であり、親世代は45～55才と想定すると、この結果には意外の印象を持つ。いくつかの機関のアンケート調査や現代社会の解説書と比較するとなおさらである。

このような家庭と学科の性質や学科内のしつけが影響しているのであろうか。学生たちは、いくつもの美質を持っている。

- ・根気強い。課題提出—添削—返却—修正—再提出 を2～3回重ねても、途中で投げ出さない。
- ・いたずらに自己主張せず、まずはやってみようという柔軟性がある。
- ・文字を丁寧に書く。
- ・遅刻、授業中の私語が無い。
- ・挨拶がきちんとできる。無言ですれ違う学生は皆無である。
- ・箸使いが美しい。

どれを取りあげても、学習のスキルは十分備わっていると言えよう。ところが、レポート、テスト点となると、いまひとつ振るわない。とりわけ、論理的思考力、表現力の不足が目立つ。行事に関わることばの読み書きや、行事の内容・様子を説明することはできて、なぜ行うのか、といったいわれを、文化史的事象として記述する学力が身に付いていないのである。無論のこと、この原因が彼女たちの基礎学力の不足にある、などと言うつもりは毛頭ない。なぜなら、理解と無関係に存在する表現のスキルはあり得ないからである。学生が確実に理解できる方法を工夫したのか、評価は、指導を行ったことに対して行うべきではないのか。このような反省にもとづき、平成19年度秋学期においては、学習活動の方式化を試みた。具体的には、授業で知り得た情報をきまった手順で、きまった文章形式に要約・再生することで、理解の深まりと定着をめざした。本稿はその実践報告記録である。

## Ⅱ 事前指導としての診断的評価

稿者は、非常勤講師として一週間に一度学生に接しているにすぎない。これにはまっさらな状態で学生と向き合うことができる、という利点がある。しかし、評価は指導と連動して行うべきであるとの立場から、かねがね不安を抱いてきた。仮に客観的な評価がCであったとしても、全15回の授業期間にスキルアップがあったのであれば、評価Bを与えるべきであろう。授業態度や出席状況を加味する、ということのなかには、こうした視点も含まれると考える。したがって、履修者の学習度や興味・関心などを予め捉え、その上でひとりひとりの望ましい到達度を設定しておくことは、授業者にとって喫緊の責務であると言えよう。この意味から本章では、履修者を対象とした調査を通して行った診断的評価を提示するものである。

### 1. 調査方法

調査の内容は、昔話・伝説に関わるもの1問、年中行事に関わるもの1問である。

#### (1) 調査時期

2007年9月25日「年間行事論」初回授業時

#### (2) 調査対象

短期大学部専攻科生55名

#### (3) 課題

以下の指示を与えて約30分間で記述する。

- ①「金剛院と狐」（各自にプリント配布一資料1）を読み、伏せ字部分をうめる。

〈資料1〉 ※□内が伏せ字

#### 金剛院と狐

昔々ある所に、金剛院という山伏の修験者がありました。旅をしていて久しぶりに、元気よく自分の村に還って来ましたが、村の入り口の岡の陰に、大きな狐が一匹いい心持ちそうに昼寝をしているのを見つけました。金剛院はそっと抜き足をして、寝ている大狐の傍へ近寄り、手に持っていた法螺の貝を、狐の耳元で声高に吹き鳴らしました。そうすると狐はびっくりして飛び上がり、転がるようにして逃げて、遠くの草の中に隠れてしまいました。

これが狐には余程くやしかったと見えて、いつの間にか讐討ちをたくらんでいたのであります。ちょうどこの次の日の晩に、町に修験者の寄り合いがあつて、昨日還って来た金剛院も出て来るようになっておりました。村々の山伏たちは、方々から集って来まして、連れだって町へ出ようとする途で、実に珍しいものを見ました。□一匹の狐が人の通るのも気が付かぬらしく、池の端に立って水鏡を見ながら、しきりに草や木の枝を頭に載せ、肩に掛けています。何をやるのだらうとそっと見ておきますと、やがてぶるぶると身を振わせて、忽ち金剛院の姿になりました。□そうして足早に何処へか隠れてしまいました。憎い狐じゃないか。ああして今に遣つて来て、我々を騙すつもりであろう。来たら引っ捕えて松葉いぶしにしてやろうと相談して、山伏たちは待ち構えておりました。本物の金剛院は、そんなことなどは夢にも知らず、少し遅れて集会の席へ出て来ますと、やあ金剛院よく来られたと言って、一同が手を取ってまん中へ押

し出しました。若い山伏が尻を探ったり耳を引っ張ったりします。何をするのかという間もなく、はや誰かが縄を持って来てぐるぐる巻きにしてぶちました。そうして青松葉をうんと焚いて、息が出来ないほど燻したり敲いたりしました。金剛院は狐が化けて来たのだと疑われていることを知って、決して狐でないという証拠を、色々として見せましたから、漸くのことで縄を解いてもらうことが出来ました。実は昨日外から帰って来るときに、罪もない狐を法螺貝で驚かしたから、狐がそれを怨んでわざと化るような風を見せて、こうして皆にいじめさせて、し返しをしたものであろう。もう是からは昼寝をしている狐を見つけても、決して法螺貝などを吹かぬようにしようということになったそうであります。(紀州西牟婁郡)

(出典 柳田国男著『日本の昔話』)

②ひなまつりについて説明する。ただし、この行事を全く知らない人に説明するという前提で文章にする。

(4) 評価要件

①「金剛院と狐」について

話の内容と前後関係から、伏せ字部分が狐が化ける場面であると理解して、その方法やプロセスを描いている。また、文章は、昔話の語りの形式にのっとり、かつ、原文にそぐったものであることが望ましい。

②ひなまつりについて

以下の情報がすべて文章の中に含まれている場合を5点、4項目→4点、3項目→3点、2項目→2点、1項目→1点とする。また、これらの情報の整理を行いつつ、一定の合理性を保って述べていることが望ましい。

1. 暦日(3月3日)
2. 名称(桃の節句)
3. 女兒の健やかな成長を祝う日である。
4. 雛人形の意味・いわれ・由来など
5. 行事食・そなえもの。

2. 結果・考察

(1) 「金剛院と狐」について

〈狐と子ども文化〉

日本の説話や伝承や俗信の中で、主役を張ってきた動物は、狐である。狐はトリックスター(いたずら者)として本領を存分に発揮してきた。いま、子ども文化との関わりに限ってみれば、近世中期以降、狐は子ども向けの絵本においても幅をきかせはじめている。狐たちのテリトリーにはおおよそ次の三つがあった。

①変化話・誑惑話……人間の姿に化けて人間界に出没し、人間をたぶらかしたりからかったりする。一方で人間に助けられて恩に報いたり、人間と夫婦となって子を産んで去る狐や、富をもたらす狐もいる。{古代からの説話や前代のお伽草子を継承したもの}

②異類合戦話……狐、あるいは狐と他の動物や妖怪とが、他の動物や妖怪・器物と争う。{お伽草子の異類合戦を近世化したもの}

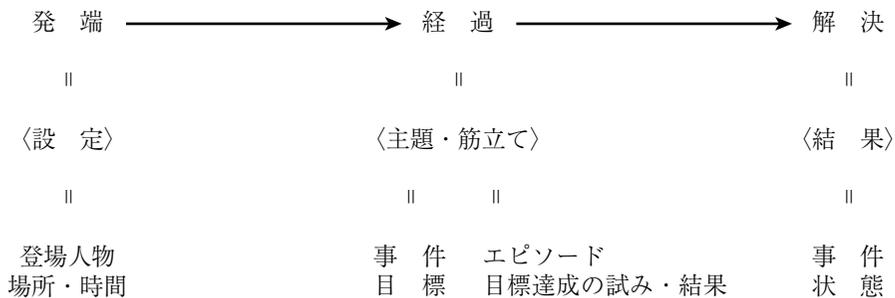
③嫁入り話……狐が半分擬人化された存在となって、婚礼にまつわる一連の行事をくりひろげる。{見合い、結納、輿入れ、結婚、出産、宮参りの次第を、狐の世界に想を移して見せる女の子のための人生儀礼絵解き、お伽草子の祝儀ものと近世初期以降の女性用教訓書を範としている}

いずれも子どもの話の母型であり、③を除けば今日にも及ぶ狐話の類型であった。

〈狐話に対する親密度〉

では、学生たちは狐話にどの程度馴染んでいるだろうか。調査では、仮に「金剛院と狐」の話は知らなくても、昔話の標準的な展開の仕方（図1参照）と、狐話についてのそれなりの情報を持っていれば、内容の欠落を補うことができると予想したものである。

図1 昔話の構造



結果は極めてよかった。55名中53名が的確な場面把握ができていた。表1は、当該部分をものように作文したかについて、化け方のパターンを基準に分類したものである。

表1

	化け方のパターン	人数
A	葉っぱを頭にのせて、くるっと宙返りする → 金剛院になる	37
B	葉っぱを頭にのせて立ち上がり、呪文を唱える → 金剛院になる	5
C	くるくると回りながら尻尾を振って煙を出す → 金剛院になる	4
D	草の実をつぶして化粧をする → 金剛院になる	3
E	口に魚をくわえ、頭に葉っぱをのせて くるっと宙返りする → 金剛院になる	1
F	池のほとりに立ち葉っぱを頭にのせ、水草を肩にかける。 呪文を唱える → 金剛院になる	1
G	稲荷社の鳥居の前にそなえものを山と積みあげ 一心に祈る → 金剛院になる	1
H	川原で手ぬぐいを頭にのせくると宙返りする → ネズミになる → 手ぬぐいを頭にのせ宙返り → 狸になる → 手ぬぐいを頭にのせ宙返り → 金剛院になる	1

これらの化け方は、Gを除けば、どれも昔話や世間話に伝承されてきた正統的な化け術である。その情報源は大別して次の四つであろう。

①祖父母や両親から語り聞かされたり、絵本を読み聞かされた。②同様に幼稚園や小学校の先生、あるいは、ストーリーテラーから聞かされた。③テレビ・アニメ・紙芝居 ④自分で絵本や物語を読んだ。

これらの体験は截然と区別できるものでなく、二つないし、三つにまたがっているというのが実態であろうが、作文は大別して三つのカテゴリーに分かれた。第一はアニメやマンガからかなり影響を受けていると思われるもので、11例あった。第二类は、昔話に対する体験が豊かであると判断できるもので、5例である。残る37例はどちらも決めかねるが、数からすれば、専攻科生の標準型作文と判断してよいだろう。以下それぞれのタイプの作文例として、7例を示してみた。

#### 〈作文例〉

##### 例1

一匹の狐が、一枚の大きな葉っぱを頭にのせて、呪文を唱えています。ドロンパドドロドロポン！ ポン！！ ひゅ～どろん、あつという間に金剛院になりました。 H.T

##### 例2

一匹の狐がものすごい勢いで回っているのです！ こ～ん くる～ん むむむ…もくもくシュ～。尻尾から赤い紫色の煙が出ています。グルグルグルグル シュ～ なんと金剛院の姿があらわれました。 T.T

##### 例3

川原に一匹の狐が立っているのです。頭には手ぬぐいをのせています。くるりんぱっ！ネズミになりました。でも、すぐに狐にもどりました。頭に手ぬぐいをのせています。「な～るほど…化け方の練習をしているのだな。」くるりんのぱっ！ タヌキになりました。でも、すぐに狐にもどりました。頭に手ぬぐいをのせてどろり～ん くるりんのぱっ！！ 金剛院の姿です。狐の金剛院は川をのぞいて、へっへっへっとなんて笑っています。 M.A

①音声化したフレーズ②片仮名「！」「！！」「～」「…」などの記号と③文末が「た」（過去完了）以外の助動詞で閉じられるフレーズが出現している、との3点が共通する特徴である。文末表現の問題を除けば、どれもが、マンガやテレビアニメを活字化した読みもの、さらに子ども向け絵本では常態化しているというのが現状である。したがって、少なくともフィクションを作文する限りにおいては、これらを使用することに対して、抵抗感はないのであろう。

残るのは文末表現の問題である。これについては、昔話の時間に対する表現形式という視点

から捉えることができるであろう。昔話が、物語の発端と結末にあたって、これを明示する独特の表現を備えていることはよく知られている。冒頭は「むかし」またはこれを重ねた「むかしむかし」、あるいは「むかしあったけど」で語り始められ「あったとさ」「これっきり」「いちご・さっけ（一期栄えた）」などの文言で締めくくられるのが普通である。この形式は『日本昔話辞典』<sup>1)</sup>を参照すれば、昔話を日常のことばや話と区別する機能を持つという。すなわち、語り手は聞き手にこの両句をもって昔話の始まりと終結を宣言し、これに挟まれた話が日常の体験や信仰そのままのものでなく、伝承したものであることを示し、したがって、語り手は話の真偽について責任を負えないとすることが、保証される。「比喩的に言えば、言葉による絵を空間から区切る額縁の機能に相当するものであろう。」<sup>2)</sup>と解説される。

そうであるなら、昔話の「昔」は「今」とは直接つながらない非体験的過去の世界を意味し、昔話は特有の時間空間様相を帯びた体験領域であるということになる。そしてまた、昔話の時間に関する表現形式は、過去完了であることが必定であると理解することが叶う。過去完了が昔話の主導時制だと言ってよいであろう。

さて、そこで、先掲の作文例に戻って文末表現に注目してみよう。「ました」の間を縫って「ます」(丁寧)「です」(断定)「だな」(納得・確認)の助動詞が使用されている。これらは現前する事実をそのまま述べるもので、その場に身を置く人々の状態・動作と、時限において変わりはない。逆に言えば現時点での事実としての動作・状態が述べられていることになる。それはあたかもライブ中継を聞くが如き感を催させるものである。なぜこういう事例が現れるに至ったか、稿者には答えが出せないでいる。ただ、昔話は言語そのものが大事なのであって、言語の形をはずしては昔話は存在しない。この点で、今回出現した事例が一過性のものかどうか、継続的観察が必要であると考えられる。

以上の事例に対して、次の4例はオーソドックスなタイプである。例4は先の分類で標準型としたものであり、例5から7は昔話に対する体験が豊富であると判断したものを挙げている。

#### 例4

一匹の狐が大きな木の下で大きな葉っぱを頭にのせていました。そのうちにくると宙返りをしたかと思うと金剛院になりました。 SS

#### 例5

一匹の大きな狐が、池のほとりに立って大きな木の葉を頭にのせていました。松の木のかけから見ていると、水草をとって肩にかけました。そしてぶつぶつと呪文を唱えだしました。そのうちにもぞもぞと動きだしたかと思うと、あっという間に金剛院の姿になりました。 Y.Y

例 6

大狐が一匹、稲荷社の赤い鳥居の前をいったりきたりしていたのでした。見つからないようにそっと見ておきますと、柿やら栗やら山と積みあげました。次に、大根やら茄子やら人参やら山と積みあげました。最後に油揚げを山と積みあげますと、一心不乱に祈り始めました。やがて、しきりに体をふるわせて金剛院になったのでした。 H.S

例 7

野原のやぶの蔭に一匹の狐がいて、2本の前脚で土を掘っておりました。気づかれないように地面に伏せて見ておきますと、土の中から魚を掘り出して口にくわえました。そして大きな木の葉を頭にのせて仁王立ちになりました。やがて、こおんとひと鳴きしますと前脚を合わせて呪文を唱え始めました。たちまち金剛院の姿が現れました。 Y.S

例5の水鏡（水面を鏡とする）の趣向はお伽草子以来のそれだから、狐狸たちの、言ってみれば伝家の宝刀であり、昔話にもよく認められるパターンである。しかし、管見の限りでは、絵本やアニメなど現代作品には出てこないようである。昔話を語り聞かせられたり読み聞かされる、さらには自分で読むという体験を通して身に付けた物語情報であろう。

例6のHSは「創作しました」と書き添えていた。とはいえ、同じ儀式を3回繰り返し、しかもその3回をほとんど同じ言葉で語っている。これは、昔話が3回の繰り返しを好み「同じことが起きたら、同じ言葉でくり返す」<sup>3)</sup> という昔話の定式に叶うものである。

また、狐、稲荷社、油揚げの連想の活かし方も巧い。さらに「～ますと」というつなげ方をしている。これは原文に何度か使用されているものである。以上から、この事例は、知識や情報とともに、作文にとりかかる前に、効果的な表現や構想を十分練るという方略が実行されている事例として注目される。

同様に例7も表現への目配りが利いている。また、狐（動物）が食物を土中に埋ける習性と、狐が秘伝の巻物を口に銜えて化ける伝統的な趣向とを重ね合わせているあたりは、見事という他はない。昔話の作法に十分馴染んでいることを示唆していよう。

以上の考察によって、専攻科生の昔話に関する知識の一端について捉えることができた。

表2は、これを短期大学の成績評価の規準に照らして評価したものである。

表2 昔話の知識

評価	昔話の構造に対する理解					昔話の形式に対する理解				
	S	A	B	C	D	S	A	B	C	D
人数		53			2	1	41	11		2

昔話には、年中行事の日にちの指定が語りこめられている話や、行事の由来として伝えられる話が多い。それというのは、総じて昔話は時日を定めて、それは多くの場合、ハレの日に、語り継がれてきたものだからである。逆から言えば、昔話はそれ自体がハレの言葉であり、年中行事では昔話が語られる場面が必ずあったということである。幸いなことに専攻科生は昔話を理解する基礎を備えている。授業での有効的な活用を考えたい。

## (2) ひなまつりについて

女子学生にとって印象深い行事であると思われる。とはいえ、専攻科生の家庭での実施率は10%に満たない。以前のように娘が嫁ぐまでという考え方が薄れてきているのであろう。調査結果はこれを反映するものとなった。表3、4、5がこの結果である。

表3 ひなまつりの知識

	5点	4点	3点	2点	1点
人	1	4	25	19	6

表4 ひなまつりの知識

	3月3日	桃の節句	行事の意味	雛人形のいわれ	行事食・供物
人	34	11	42	1	24

表5 行事食の内容

	散らし寿司	ひなあられ	蛤の吸い物	甘酒	白酒	草餅・菱餅
人	21	20	16	5	2	3

表3では、情報5項目のうち、3つまで答えられた学生は30名となっている。また、表4からは、約80%の学生が桃の節句という呼称を想起してないことがわかる。これは、桃の花、桃の枝を飾る、もしくはそれを見るという実体験が無いからなのか、それとも、実体験はあっても幼児期の体験であるために印象が薄いことによるのか、にわかには判断できない。しかし、作文を見る限りでは、後者の推測が妥当であるように思われる。というのは、幼い頃の行事体験の思い出として作文している例が19例出現し、そこでは、申し合わせたように桃の節句の情報がぬけ落ちていたからである。思い出作文は、課題の主旨からはずれていることは言うまでもないのだが、裏側から言えば、ひなまつりの知識のほとんどが懐旧に負っていることに他ならない。

行事食については二極化した。3品ないし4品をあげた学生が31名いた一方で、残りの24名は全く触れていないのである。食材の地域差は考えられず、幼稚園や保育園での体験に差があるとも思えない。不思議としか言いようのない結果となった。

なお、その他として1点付け加えれば、ひな人形を3月3日を過ぎた後も飾っておくと婚期

が遅れる、との俗信に36名が触れていた。よく知られているようにひな人形のルーツは、紙や草や木片でひとがた（人形）をつくり、それで身体を撫でて穢れを移したあと、川や海に流すというものであった。これが「流し雛」ともなり、「お雛さまよ、来年ござれ、海よ見て、川見て、再来年ござれ」の歳事歌ともなる。一方で現行の雛人形はひとがたが装飾化された極にあると考えれば、人形をしまうことが大きな意味をもつことに気付く。このように、言い習わしにはそれなりの背景があるのだから、言い習わしを紹介しただけでは、客観性に欠ける。したがって、これについては、ひなまつりの知識としてカウントしなかった。

この調査では、評価要件に挙げた如く形式操作的な情報処理の能力を捉えることも目的としていた。これについてはどうであろうか。例8から13として6名の作文を示した。

説明文は書き手の考えをもとにして書かれるのはもちろんであるが、自己表現や自己体験の表出とは異なる。説明文とは「あるもの、ことに関する知識・情報を、まちががなく、しかもわかりやすく人に伝え、知らせようとする文章」<sup>4)</sup>である。したがって、説明文を書くにあたっては次の5点に留意しなければならない。

- ①説明内容の把握（何を）
- ②読み手の把握（誰に）
- ③文章構成（どのような順序で）
- ④叙述（語句・用語・表現）
- ⑤接続詞・つなぎのことば・指示・代名詞など、関係を示す方法

この観点から例8は5点（満点）、例9は4点としたものである。

#### 例8 評価5点

3月3日に女兒の健やかな成長を願って行方お祭りである。桃の枝を飾ることから桃の節句という。この日には男女1組のひな人形を飾り、白酒、草餅、蛤のお吸い物などで祝う。ひな人形は、災いを身代わりとなって持っていつてくれる、といわれている。このため、3月3日を過ぎた後は、できる限り早めに片付けるのが良いとされている。 HS

#### 例9 評価4点

女の子の成長を祝い、将来の幸福を願う行事である。3月3日に行われる。男雛女雛と呼ばれる1対の人形を飾り、桃の花をおそなえする。ここから、ひなまつりは桃の節句という呼び方もする。人形には、甘酒、菱餅、蛤のお吸い物などおそなえし、同じものを家族そろって食べてお祝いをする。 SS

例10は、一つの文に情報を詰めこみすぎていること、人形を主題にしていることはわかるが、誰に説明するかという意識がはっきりしないために、適切な表現が決まっていないとの理由から3点とした。例11も誰が読むのかという点が把握できれば、自分が伝えたいことと表現とのずれを調整することができるだろう。

例10 評価3点

3月3日の桃の節句に女の子の健康と幸福を願う行事で、事前にひな人形を飾り、桃の花やひし形の餅、ひなあられ、蛤の料理などをおそなえして、3月3日を過ぎると早めに片付ける。お内裏様おひな様と一緒に流す風習もある。 Y.M

例11 評価2点

女の子の成長を祝う行事、桃の節句という。ひなまつりの飾り（ひな段）を3月3日過ぎた後も飾っておくと、お嫁に行けないという言い伝えがある。はまぐりのお吸いもの、ちらしずしを食べる。 S.K

最後に評価1点の作文を1例、評価保留の作文を1例示した。例12は、①したことや、思うといった体験・自己表現が混在している。②どのような順序でどんな表現を用いて③誰に④論理の流れを示す方法について意識していない、との点が減点対象となった。

例12 評価1点

3月3日にひな段を出し、あられを食べたりする女の子のお祭りだと思う。ひな飾りには、おだり様とおひな様、3人かんじょ、右大臣と左大臣、5人ばやし、重箱、ほんぼりなどできれいだった。あられの他に3色のひし形もちも飾った。ももの木とゆずの木を飾る。 Y.K

例13 評価保留

ひなまつりは3月3日に行う女の子のためのお祭りです。お内裏様とお雛様はすでに金屏風を背にして、赤い毛せんに座っています。左大臣と右大臣がお仕えし、桜と橘もお二人をお守りします。お道具のお披露目もすみました。お伽犬は良い子の誕生を約束してくれるでしょう。夜をむかえほんぼりに灯りがともりました。五人囃子のかなでる楽の音のみやびなこと、婚礼の宴の始まりです。 Y.Y

例13はやや特異な事例である。全体を物語風に綴っている。とはいえ、雛段を宮中の雅びな遊びの再現とも、また華燭の宴の見立てともする理解に誤りはなく、知識も驚くほど確かなものである。それだけにどのように評価すべきか判断がつかかねた。継続的な観察と今後の指導に俟ちたい。

以上の考察を経て履修者の、一定の合理性のもとに文章を書く能力について評価した結果が表6である。また、表7は、説明的な文章を書く際に必要な5つの項目のうち、何が苦手であると判断できるかについて、高い順から挙げたものである。

書くことにおける論理性の大部分を担っているのは、文章の組み立て（構成）である。これについて、専攻科生はこれまでも、授業や卒業論文の作製などを通して、直接間接の指導を受けてきたであろう。しかし、今回の調査結果を見る限りでは、何を書けばいいかはわかかっていても、どうすれば書けるかを身に付け、実際の文章表現に活かしてきたか、となると、必ずしも十分であったとは言いがたい、というのが現状だろうと思われる。せめて、400～500字程度の論理的な文章を書くことができるように、学習の筋道をつけたいと考えるものである。

表6 文章表現力について

	S	A	B	C	D	保留
人	1	3	9	36	5	1

表7 何が苦手か

項目	構成比
文章構成	92.7%
関係を示す方法	90.9%
語句・用語	72.0%
読み手の把握	60.8%
内容の把握	45.5%

### Ⅲ 「年間行事論」の授業のねらいと内容

#### 1. 授業のねらい

〈現在認識としての由来〉

人は誰でも生きていく過程でその人固有の物語を紡いでいく。誕生にまつわる秘話、幼児期のエピソード、反抗期における危機的な状況と回復を果たした筋道、偶然に彩られた人との出会いなど、それらすべてが今ここにある生命とつながっている。野村敬子は、このような体験、とりわけ誕生や成長にまつわるエピソードが、その人の人生を支える体験やふたつとない自己立証となる契機を、育児空間で語られる昔話に見い出している。<sup>5)</sup>野村が紹介した野村自身の体験は、弘法大師の昔話世界につながる幼児期の病いにまつわる話である。肺炎をこじらせ死を宣告された。医者は両親に何でも食べたがるものを食べさせてあげなさい、と言った。「セイカン（西瓜）食いて」季節は既に秋であった。どこにも西瓜のあろうはずはない。そこに見知らぬ行商人が立ち寄ってひとつだけ売れ残った西瓜を売ってくれた。その老いた行商人に両親は思わず合掌したという。「あの人は弘法大師様だった」成長するまで何度も聞かされた。思春期にはうとましく烈しく反発した。そんな時に決まって心を鎮めてくれたのは、生まれた時から家にお手伝いさんだった。親たちの焦燥、家業を幾日も休み八方手を尽くしたこと、行商人への感謝、弘法大師に助けられた生命の不思議を繰り返し語って。

血のつながらない人々までもが手を添えて、青年期にありがちな危うい状況を支えたかつての子育て環境の消息。それ以上に耳目を引くのは、古伝承世界が生きて働く力であろう。野村の家郷は山形県朔北だという。弘法大師の遊行伝承を色濃くとどめる地方のひとつである。老いた行商人はお大師様以外ではあり得ない。野村が言うように「人にとっての伝承的消長が鋭

い現実として立ち現れた一瞬であった。』<sup>6)</sup> 別に言えば、伝承的世界を人々と共有することで、他者の論しを受け容れることが叶い、生命が自分だけのものでない道筋を理解したのである。

行事の由来というのもまた、人間のこうした営みのひとつとして立ち現れてきたものに他ならない。正月に餅を食べるのはなぜか、なぜお地蔵さまは子どもの守り神とされるのか、七歳という節目年齢がことさら重要視されるのはなぜか。これらの現前する事象を解き明かそうとすると、人は必ず過去を振り返り、証拠を求めることで納得と理解を導き出そうとする。こうして、人ははじめて現前する事象 (= 今) に対して意味を見出すことになる。このことは、およそ世界の民族の中で自分たちの間に神話や伝説や昔話をもたない民族は存在しない、という事実からもわかるだろう。

このようにして示される過去の記述と言説のすべて (文学・芸能・民間口碑) が由来である。

したがって、由来は時間軸を往還しての因果律の提示であり、**現在→過去→現在**という構造をもつ。これを、物語の文法に<sup>7)</sup> 準えて由来の文法と定義し、その上で学習活動の方式化に活用してみた。

## 2. 学習活動と学習内容

### (1) 学習活動の方式化 その方法

ここで言う学習活動の方式化とは、授業で知り得た知識や情報を、決まった手順で決まった形式に再生ないし要約すること、であり理解と表現の同時一体化を図るものである。そのため、まず先の由来の文法と文章表現における基本的な型とを一体化したワークシートを用意した。資料2がそれである。また資料3と4は、それぞれ、ワークシートの解説と例文である。

#### 〈資料2〉 ワークシート「由来を書いてみる」

序論 (はじめ)	(構成メモ)	キーワード
<div style="border: 1px dashed black; height: 150px; width: 100%;"></div>	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;">                     主 題 提 起                      現 在 状 況                 </div>	
<div style="border: 1px dashed black; height: 50px; width: 100%;"></div>	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;">                     過去に遡っての具体例                      例えば                       また・更に・あるいは                 </div>	
<div style="border: 1px dashed black; height: 50px; width: 100%;"></div>	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;">                     要するに・したがって                      現在状況                 </div>	

〈資料3〉 由来を説明する文章の型

時間	段落	文章構成	役割	構成メモ	キーワード
現在	①	はじめ	あらまし	主題の提起	
↓	②	なか1	具体的事例1	例えば	
過去	③	なか2	具体的事例2	また、あるいは	
↓					
現在	④	まとめ	共通する性質	したがって、要するに、 このように見えてくると	

※注意するポイント

- (1) 文末は「である」を使う。「です・ます」は使わない。
- (2) 4段落形式で書く。
- (3) 「はじめ」は自分が書こうとしていることの輪郭を書く。気持ちや感想や考えは書かない。
- (4) 「なか1」では、事例を詳しく具体的に書く。気持ち・感想は書かない。
- (5) 「なか2」には「なか1」とは別の事柄を詳しく書く。気持ち・感想は書かない。
- (6) 「まとめ」にはなか1・なか2に共通する点をまとめて書く。自分の考えを書いてよい。
- (7) 分量は400字から500字を目安とする。

※完成させるためのポイント

- (1) 初めに「なか1・なか2」を書くとききやすい。
- (2) 「はじめ」は最後に書くとききやすい。
- (3) 題名は最後に決める。「まとめ」の段落からキーワードを選んでつけるとよい題名になる。

〈資料4〉 例文<sup>8)</sup>

日本人はよく「もち」を食べる。もちが日本の古文献にどう登場するのか調べた。

奈良時代の『豊後国風土記』（ぶんごのくにふどぎ）には、次のような話が出てくる。「北から白い鳥が飛んできてもちとなるが、人々もちを弓矢の標的にしたところ、もちは鳥に戻って南に飛び去り、水田は荒れ果ててしまった。」もちは稲を象徴する霊的存在だったようだ。

時を経て、平安時代の漢和辞典『倭名類聚抄』（わみょうるいじゅしょう）には、「しとき」というものが登場する。これは、生米を水に浸して軟らかくしてからキネで突き砕いて固めた食べ物だとある。使う生米は、ほとんどがもち米ではなくうるち米だが、神様に供えたことから、もちの原形ではないかと考えられている。

いにしえより、自然の恵みである米粒を凝縮したもちには霊力が備わり、神の世界の食べ物だと位置づけられていたようだ。その考えは、現代も受け継がれていると言える。

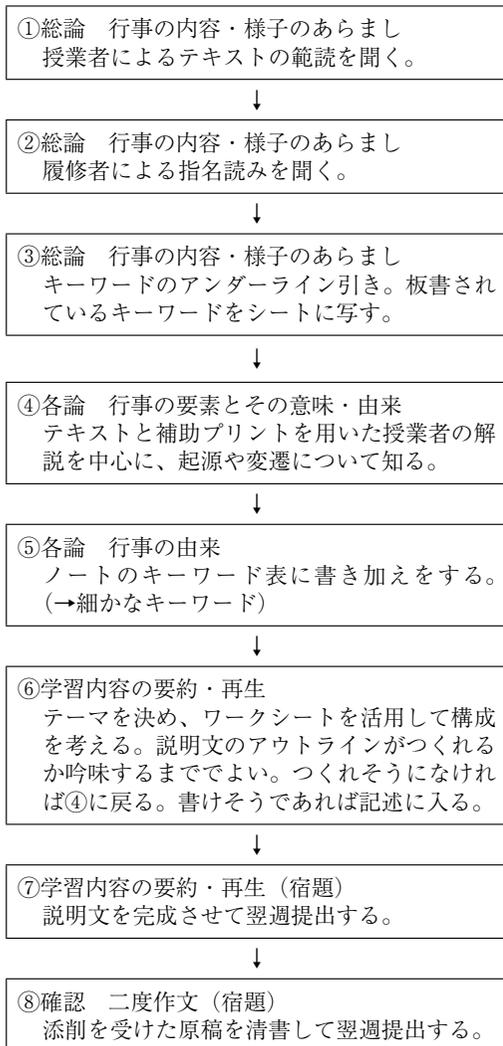
(2) 指導目標

- ①行事の様子・内容を理解し、知識を身に付ける。
- ②行事に出てくる語句・語彙・漢字を理解し、知識を身に付ける。
- ③行事の由来を知るためには、どのような資料があるかを理解し、それらを活用することができる。
- ④行事の由来について、根拠となる情報を選び、これを基に論理的に文章を組み立てて、他者に伝えることができる。

IV 授業展開の実際

1. 1回の授業における学習活動の流れ

学習活動の流れ



ここでの実践は、授業が授業者による解説に終始するものでなく、書き込むことによって理解を定着させていく指導を繰り返す方法である。したがって、実質13回の授業の展開は毎回共通の形をとったわけであるが、以下には10月2日および9日の大晦日・正月の授業記録を提示している。

正月行事は盆行事とともに年間で一番大きな行事である。また、本授業は、学習活動の方向性と手順とを理解するスタートとなる授業であるため2回分をあてた。授業内容は、正月の準備にとりかかる12月下旬から大晦日、元旦前後の行事と由来である。

「学習活動の流れ」③の場面から

履修者の書く作業は、キーワードをノートに写すことから始まる。その際に指導したポイントは次の3点である。

- ・キーワードには大まかなものと細かなものがある。
- ・大まかなキーワードと細かなキーワードは並列しない。入れ子式に考えるとよい。
- ・ノートは書き加えができるようにスペースをとっておく。(見開き2ページ程度の目安)

板書

キーワード表をつくる

③の場面での板書

⑤の場面での書き加え（履修者による）

大まかなキーワード		細かなキーワード
A	a	a'
暮れ	正月始め 門松 注連縄  鏡餅 生命力の更新	煤払い 年神 神迎え 依代 常緑樹 山 松迎え 神の宿る植物 依代 年神を迎える門松、迎えて注連縄 端出之縄 (しりくめなわ) 依代 ユズリハ 串柿 予祝 丸餅 稲魂の分配
大晦日	年越し・年取り 年取りの魚・ 年取り膳 年取り話	年神の来訪 祖霊 穀霊 お正月様 年どん 年籠り ハレの食事  大歳の客 大歳の火 笠地藏 行事と昔話
元旦	雑煮 お節料理 屠蘇 お年玉	烹雑 餅直会 鏡餅と雑煮 ハレの食事 節日 節供 節供食い 薬酒 年魂 身上餅 年神とお年玉 年神の投げ玉 丸餅

⑤の場面から

④で読むこと、聞くことに集中した後、キーワード表を完成させる作業である。④での理解が不確かであれば、ぼんやりとしたキーワードしか選べない。ここではあえて板書をせず机間指導を行った。苦戦している学生には資料プリントに授業者が直接赤線を引く、あるいは赤線を引いて簡潔なキーワードを脇に書き添えるようにした。20分以上の作業を了え、3名を指名して黒板のキーワード表に書き加えをさせた。また、自分のキーワード表に無いものを書き込む場合には赤ペンを使うよう指示した。こうして完成させたキーワード表を学習活動⑥で活用する。

⑥の場面から

ここでも学習活動の大半を書くことにあてた。テーマを1つ決め、授業で得た知識と情報をもとに再生していく作業である。テーマ設定のメリットは学習内容を咀嚼させることである。つまり要約の学習そのものとなるから大事である。

この時点ですぐに記述に入ることのできた学生は、aをテーマとすれば、a'が表現内容・具体例であることがわかっている、もしくは、その構成に気づいた学生である。このことは、彼

女たちが〈資料3〉由来を説明する文章の型、〈資料4〉の餅の話を自発的に取り出して、見比べたり、後者の余白に書き込みを行ったりしていたことから推測されたことである。一方、手にとまっている学生が10名程度いた。そこで、ここでも、机間指導を行い、キーワード表Aの上に大きなテーマ、aの上にしばったテーマ、a'の上に具体例と書き添えた。

## 2. 学習内容の要約・再生

### (1) 由来を書く 大晦日・正月行事

学習活動の⑦⑧は、4回め以降の授業では宿題としたが、本授業では授業時間内に行った。また授業時間内に必ず一度添削を受けるように指示した。結果として、全員が二度作文(作文→添削→清書)で課題をクリアすることができた。表8は、履修者がどのようなテーマ設定をしたか、について示したものである。この中から3名の作文を見てみよう。なお、3名の診断的評価とこれにもとづいて授業者が設定した望ましい到達度、および、学年末試験での由来を書く文章に関する成績結果を表9に示しておいた。

表8 テーマの設定

	テーマ	人数
1.	正月と餅	28
2.	年とり話	20
3.	注連縄の役割	1
4.	神の宿る木	1
5.	大晦日を語る昔話	1
6.	大晦日に聞く昔話	1
7.	丸餅から切り餅へ	1
8.	大晦日のすごし方	1
9.	お年玉の意味	1

表9 引例者のデータ

	昔話の知識		文章表現力 (説明的文章)	望ましい 到達度	学年末試験の 成績
	構造	形式			
H.S	A	S	S	S	S
M.S	D	D	C	C	B
Y.Y	A	A	保留	B?	A

〈作文例〉

#### ①H.S「正月と餅」

H.Sはテーマに餅を選んだ。論拠としてわらべ唄と出雲地方に伝わる笑い話を示し、餅なくて何の正月という気分の由来するところを、約400字にまとめた。題名は「正月と餅」である。理解の仕方、表現内容ともに問題ない。この点と添削は語句と文を見た旨を記して返却し清書させた。 ※ ( ) 内は清書前の文・語句

序論（はじめ）

正月には餅を食べるものだ、多くの日本人がそう思っている。なぜだろうか。（これはどういうことだろうか。）

本論（なか）

古いわらべ唄に「正月さま」という唄がある。たとえば、信州ではこう唄う。「正月の神さんどこまで、キリキリ山の腰まで、土産にゃ何だ、小豆餅ね、栃餅」。子どもたちは餅は年神さんがもってきてくれると教えられていたようだ。年神から餅をもらう話は昔話としても伝えられている。

ある男が年をとりたくないので竹やぶの中にかくれていた（が、）。ところが年神が竹の上から餅を投げにいったので、仕方なく年をとった、という笑い話である。この話は「年神の投玉」といわれているという。また、この餅を“年玉”と呼んでいるそうである。つまり、年神のお年玉が餅というわけだ。

結論（まとめ）

餅には、新しい年を迎えさせる、年を重ねさせる力がこもると信じられてきたようだ。すべてのものが新しくなる正月には、無くてはならない食べ物だと言えるだろう。

②MS「神の宿る木」

MSの診断的評価は芳しいものではなかった。「金剛院と狐」では場面の読み取りのできなかった学生が2名いたが、MSはそのうちの1名である。また、ひなまつりについての説明文の評価も1点であった。しかし、授業態度は極めて良い。例えばノートの取り方である。大部分の学生は、講義を聞く場面では聞くだけに終始している。授業者が板書しなければ、あるいは、ポイントであることを伝えなければ手が動かない。この点MSは、常に何らかの付加的活動を行っていた。MSのノートを見るとこちらの講義した内容がすべて書かれている。加えて、矢印や囲みや記号を用いて、言われたことの関係づけや、語句の言い換えを行うといった作業をしているのである。このような意欲は由来文を書く際にも発揮された。依代というむずかしいテーマを選んでいく。しかも、言いたいことを「神の宿る木」と規定している。具体例として『古事記』の天岩戸のくだりと民俗事例（神楽）をあけて約500字にまとめた。学術論文などでは文献資料と民俗事例とを同じレベルで扱うことには難がある。しかし、ここではそこまで厳密である必要はなく、ルール主導主義は意欲をそぐものになりかねない。MSの場合、読むことと書くことへの抵抗感を解消することが先決と考え、よく書けていること、直したい所があれば直してもよい旨を記し、あえて添削をせずに返却し清書させた。

序論（はじめ）

お正月には（神さまにきていただくために）門松を用意する。正月の神さまは門松を目印にやって来て、門松に宿るそうだ。場所によっては椿、檜、榊などを飾るところもある。ところで、木に神さまが宿るといのはどういうことだろうか。

本論（なか）

日本で一番古い文学・歴史の書である『古事記』に、榊をお祭りに使った話が出てくる。天の岩屋にとじこもってしまった天照大神を誘い出すために、岩屋の前でお神楽をすることになった。いろいろな準備が整ったところで最後に、天の香山から根のついたまもってきた榊を立ててお神楽を始めた、という。

もうひとつ例を引くと12月から新年にかけて花祭りという行事が行われる地方がある。ここに登場する鬼は榊鬼といって、榊を腰に差して、榊を持って山からおりてきた鬼だ。榊鬼は榊を神主と綱引きのように引き合った後で手を放すと、お祭りに参加している人たちと踊り始めるそうだ。榊は（榊の方はどうなるかという）神前に供えられる。榊鬼は榊をもって山から祝福にやって来る神さま、という見方がされている。

結論（まとめ）

こうしてみると、山そのものが尊ばれてきたことがわかる。木は山のシンボルだから、山の木をもってくるということは、山の尊い力をもってくることと同じだと考えられる。

③ Y.Y 「大晦日を語る昔話」

Y.Yは伝説や昔話を好む。ある事柄を説明するという事態でも、物語の表現形式を利用しようとする傾向がある。（「金剛院と狐」作文例5、ひなまつりの作文例13参照）。このことは、Y.Yが言いまわし、リズムなどの文体とともに、説明文の特徴である記述的な概念化、話題のあらましを示した後、各々について段落単位で説明を加えていくパターンなどに習熟していないことを示唆しているように思われる。Y.Yの書き方を観察していると、まず具体例から書き出した。構成メモも本論（なか）の部分はびっしりとうまっている。一方序論（はじめ）と結論（まとめ）の部分は何の書き込みも無い。そこで、授業者が前者に「この昔話の特徴、ただし事実」後者に「この昔話の特徴、今度はあなたの考え」と書き添えた。その上で、この段階で目標指向的な書き方ができるように筋道をつけるべく、Y.Yにかかわって序論を書いて示した。こうしてできあがったのが「大晦日を語る昔話」である。

序論（はじめ）

昔話はたいてい、いつ、どこでの出来事かはことわらない。その中で、大晦日の夜の話として語られる昔話がある。

本論（なか）

「大歳の客」は、大晦日の夜貧しい家に身なりのきたない男がやってきて泊めてくれという。庭の隅にむしろを敷いて泊める。翌朝見るとむしろの上に黄金があった。それから、年神様をまつるようになった、という話である。「大歳の火」も大晦日にやってきた人間によって富を得る話だ。要約すると（ざっと書くと）こんな話である。

1. 正直者の嫁が大晦日の夜、姑からいろりの火種（火）を消さないように言いつけられる。2. 油断していると火種（火）が消えてしまう。3. 困った嫁が家を出て歩いていると遠くにたき火が見える。4. 行くと恐ろしそうな男たちがいて火種をわけてくれるが、代わりに仲間の死骸をはずかってくれ、三日たったら取りに行くという。5. 元日の朝、死骸が金になっている。6. 嫁がわけをはなすと、姑は火種をくれたのは年神様だったにちがいないという。

結論（まとめ）

（まとめると）2つの話は、年の変わり目（年の変わる日）に善いことをしたり、しきたりを守ろうと努力したことから（したので）幸運に恵まれたというところが共通している。さらに（それから）、その不思議な出来事が、年神と関係があるらしいように語られるところも同じだ。こうしてみるとこの昔話は、大晦日の夜の過ごし方や心得を語っているとも読める（語っていると思う）。昔話は、行事を受け継いでいくことにも大きな役割を果たしているといえるだろう（と思う）。

(2) 由来を書く 学年末試験より

学年末試験の設問は指導目標に照らして次の内容とした。

- ①行事に関係のある語句の読み 50問 各1点配当
- ②春の七草名・秋の七草名を記す 各5点配当
- ③ひなまつりについて説明する

〔書き方〕 次の2つのうちどちらかを選んで書く

イ. ひなまつり全体を話題にする

ロ. 述べたい事柄をしばって書く 40点配当 ※持ち込み無

表10はそれぞれの設問について、最高点と最低点および平均点を示したものである。また、

表11は設問③の答案を通して理解力と表現力を評価した結果である。(採点規準は、Ⅱ診断的評価での説明文に関する評価方法に準ず。)設問③の二者択一状況については、表12にまとめた。

表10 得点状況

	最高点	最低点	平均点
①	50	26	32.0
②	10	0	7.3
③	40	16	24.0

設問③での平均点が比較的高い数値であったこと(表10)、内容の理解とともに理解したことを筋道だてて伝えることのできた学生が6割強を占めたこと(表11)、さらに、問題意識が芽生え、これを基にテーマを立てて主題文を書くことのできた学生が現れたこと(表12)、以上の3点から、学習活動の方式化という今回の試みは有効であったと判断してよいと思われる。

最後に答案を3例挙げて、履修生の到達度の一端を示しておくこととする。

#### 答案①Y.Y「犬張子の役目」評価40点

ひなまつりの中心となるのは、ひな人形を飾ることである。男雛女雛を主役とすると、ひな段にはたくさんの脇役たちがいる。犬張子もそのひとつだ。犬張子にはどんな役目があるのだろうか。

室町時代の記録には、「お伽の犬箱」というものが登場する。これは、犬の形をした張子製の容器で、貴族階級の産室に天児、這子というお守り人形とともに置かれていた、と出てくる。産着はまずこの犬に着せられ、それから生まれた子に着せられたという。犬はお産が軽く、生まれた子も良く育つといわれる。それとともに嗅覚と聴覚が鋭く頭が良いので、人間を守り、猟犬として人間の生活を支えてきた。昔話の「雁取り爺」「花咲爺」「桃太郎」「黄金子犬」などからは、犬が人間の目には見えない特別な力を持つと信じられていたことがわかる。

犬への信仰はその後も続いて、お伽の犬箱は、犬が立っている姿をかたどった犬張子に変わった。現在では安産と子育てのお守りとして、日本橋の水天宮さん、台東区の鳥越神社に伝わっている。また東京の郷土玩具としても有名である。授かった生命を守り育てようとする思いは、時代や環境をこえて、少しも変わらないといえるだろう。

表11 理解と表現 達成度

項目	構成比
文章構成	65.8%
関係を示す方法	63.1%
語句・用語	61.0%
読み手の把握	62.9%
内容の把握	75.6%

表12 テーマ設定

		テーマ	人数
1	イ.	ひなまつり	48
2	ロ.	ひなまつりと桃	2
3	ロ.	犬張子の役目	1
4	ロ.	身代わり人形の系譜	1
5	ロ.	おひなさまのルーツ	1
6	ロ.	流し雛について	1
7	ロ.	白酒の由来	1

答案②M.S「ひなまつりと桃」評価24点

ひなまつりには桃の花を飾る。50年くらい前には、飾るだけでなく、山から桃の実を拾ってきて桃酒をつくって飲んだり、お酒に桃の花びらを浮かせて家族全員が飲む、ということもあったそうだ。このルーツは、中国の古い行事にある。

古代の中国では、桃は悪いものをしりぞける樹木として尊ばれていた。それで、3月のはじめの巳の日に桃の花びらの浮いている川の水を飲んで清める行事があった。これが、時がたつて、桃の花をお酒に浮かせた桃花酒となった。そして行事の日も3月3日に決まってきた、桃花節というようになった。この風習が日本に伝わり、形が変わって白酒となったのだ。

桃は日本でも悪しきものを防ぐくだものという信仰があった。『古事記』では、イザナギノミコトが桃の実で鬼とか雷神を退散させている。また、昔話「天道さん金の綱」で山姥から逃げるのに子どもたちが桃の木に登っている。

行事のルーツが中国にあるとしても、それが入ってきて、一般に広まっていったのは、もともとそれを受け入れる基盤があったからだといえるだろう。桃を尊ぶ心は、桃の枝をお供えするという形で現代も受け継がれている。

答案③Y.K「ひなまつり」評価16点

女の子の健康と幸福を祈る行事で3月3日に行われる。桃の花を飾るので桃の節句とも呼ぶ。ひな人形を飾り、ひなあられやし餅や蛤のお吸いものや五目寿司をお供えし、自分たちも食べてお祝いする。では、ひなまつりはどのようにして行われるようになったのかについて述べる。古い時代の中国では、3月の一番はじめの巳の日に心や体の汚れを流すために祓えということを行っていた。それは、川のところに出て青い草を踏んだり、薬草をつんでお酒に入れて飲んだりすることを行っていた。

一方、日本には日本の祓えがあった。紙や草で人の形にした人形（ひとがた）を体にこすりつけて、それからそれを水に流すことを行っていた。この祓えと中国の考え方が合わさって、また、3と3を重ねて効きめがあるようにという考え方（重日思想）から、3月3日に人形を流すようになったのが3月のお節句のルーツである。

ところで、中国にはひな人形はないそうだ。だから、ひなまつりという行事もない。そうすると、ひな人形はどのようにしてできてきたのだろうか。これには天児（あまがつ）、這子（ほうこ）という身代わりの人形がある。それは必ず白い布でつくられて子どもの枕元に置いていた。大体3歳くらいまで置いていた。時が過ぎてこの人形と同じ意味で使われていたものを比々奈と呼ぶようになった、という記録がある。ここから、ひな人形に変わっていったといわれている。

まとめると、もともとは人間の身代わりとして、病気とか災いを引き受けていた人形を飾り、健康と幸福を祈る行事がひなまつりである。

## V まとめ

授業内容を一定の文章形式に要約・再生することを繰り返し、継続することで、学生たちはわかったつもりでいたが、実はわかっていなかったことに気付いた。あることを伝えるという

事態において、何を取り何を捨てるかとの客観的な判断の必要性和、できる限り適切な伝え方を考え出す（つくり出す）重要性を学んでいる。問題意識を持ち、自分たちの周りの事物や事象に意味を見い出していくことも必要と言える。

年中行事の大方は、元來信仰を起源にもつものであった。暮らしの安寧の保証を得んがために、時を定めて神に祈り、その靈力と得ようとしたり、災いを防ごうとして行われたものである。加えて、日本は四季に恵まれた国である。四季の移り変わりとわかち難く結びついて暮らしがあった。年中行事はその節目として重要な位置を占めていた。これは、人智の及び難い領域のあることを知り、自然と折り合いをつけて生きることを知っていた祖先たちの智恵の確かさの表れにほかならない。

このような年中行事の意味はもはや急速に薄れつつある。現代社会は一見足らざるものは無く、畏るるものも無きが如くに見える。しかし、容易には受け容れることのできない事件や事故の絶えることは無い。とりわけ、子どもの置かれている状況と生命の問題に関する議論は、混乱を呈していると言っても過言ではないだろう。

経済成長と高性能社会の実現によって、人が生きることに伴う問題のすべてが解決できるものではないということに、私たちが気づきはじめてすでに久しい。ここにあって、行事に語りこめられた祖先たちの智恵と、その背景にひろがる沃野は希望を見い出すことのできる重要な文化となるのではないだろうか。年中行事は祖先たちが未来に向けて用意してくれた賜物だとも言い得よう。

### 【註】

- 1) 【縮刷版】 稲田浩二・大島建彦・川端豊彦・福田晃・三原幸久編 弘文堂 1984年
- 2) 前掲註1) 同書P.929
- 3) 小澤俊夫著『昔話の語法』P.234 福音館書店 1999年
- 4) 井上尚美・田近洵一・根本正義編『国語科の評価研究』P.42～56 教育出版 1984年
- 5) 「子育てと昔話」石井正己編『子どもに昔話を！』所収P.134～143 三弥井書店 2007年
- 6) 前掲註5) 同書P.135
- 7) 物語を生成したり、解釈するための規則。1970年代後半から、認知心理学のソーングダイク (Thorndyke, P.W.) らによって、モデルが提案された。内田伸子「昔話の認知—心理学の立場から」『國文學—解釈と教材の研究』34・9 1989年 學燈社
- 8) 市毛勝雄編著『論理的文章の書き方指導中学校編』より引用P.17 明治図書出版 2007年

### 【参考文献】

- 1) アン・ヘリング著『江戸児童図書へのいざない』くもん出版 1988年
- 2) 岡本勝著『子ども絵本の誕生』弘文堂 1988年
- 3) 瀬田貞二著『落穂ひろい—日本の子どもの文化をめぐる人びと』上・下 福音館書店 1982年
- 4) 日本児童文学学会編『近代以前の児童文学』東京書籍 2003年
- 5) 坂部恵著『かたり 物語の文法』弘文堂 1990年

- 6) 野村純一著『昔話の森 桃太郎から百物語まで』大修館書店 1998年
- 7) 小池正胤・叢の会編『江戸の絵本』I～IV 国書刊行会 1987年
- 8) 徳田和夫編『お伽草子辞典』東京堂出版 2002年
- 9) 中村禎里著『狐の日本史 古代中世篇』日本エディタースクール出版部 2003年
- 10) 堤邦彦・徳田和夫編『寺社縁起の文化学』森話社 2005年
- 11) 岸学著『説明文理解の心理学』北大路書房 2004年
- 12) 日本昔話学会編『昔話 研究と資料第23号 昔話と年中行事』三弥井書店 1995年
- 13) 田近洵一・井上尚美編『国語教育指導用語辞典 第三版』教育出版 2000年
- 14) 井上尚美著『言語論理教育の探究』東京図書 2000年
- 15) 青木幹勇編『「第三の書く」の授業展開』国土社 1993年
- 16) 大林太良『正月の来た道』小学館 1992年
- 17) サントリー不易流行研究所・CDI『現代家庭の年中行事－366家族からの報告』1992年
- 18) 田中宣一『年中行事の研究』桜楓社 1992年